

北区「WA（わ）のころ」創生講座 第3回「五山送り火の歴史と民俗的意味」

メインパーソナリティー：能楽師観世流シテ方 河村 晴久 氏

ゲスト出演者：佛教大学歴史学部教授 八木 透 氏

字幕

<河村晴久氏>

皆さんこんばんは。

文化庁京都移転記念「北区「WAのころ」創生講座－文化のWA－」連続講座、今日もご聴講いただきましてありがとうございます。

今日は五山送り火の歴史と民俗的意味について、という題で、佛教大学の八木透先生にお出ましいただきまして、いろいろとお話を伺います。八木先生どうぞよろしく願いいたします。

<八木透氏>

どうぞこちらこそよろしく願いいたします。

<河村晴久氏>

八木先生という、もちろん大学の授業をなさってるんですが、京都民俗学会で、昔から私も先生を存じ上げてますし、また祇園祭や五山の送り火になると、テレビの解説では本当にいつもお目にかかって、一方的にですけどとても近しゅうお話を伺ってるような気分になっておりますけれども。

このシリーズいろいろな方にお出ましいただきますが、年中行事に関するのとは今回が初めてでございます。コロナ禍になりましてから、何かこう、いつも当たり前にある新年の行事があつて、桜が咲いて、葵祭があつて、京都薪能も私、能楽師ですから、それがあつて、祇園さんがあつて、そして送り火があつてと、毎年こう普通にあることがなくなってしまうと、もちろんご神事や儀式はなさっても、町中で普通に行き合うことがないと、なんやらこう、不思議な時のめぐりがあるみたいな、もう季節だけは移っているのかのような感覚があったんですね。今年やっというろんなお祭りもあつて、今コロナ禍大変ですけども、五山の送り火もこの間は祇園さんもできたし、送り火もあるようでございますので、やっとなんかちょっと普通に回ってるなっていう気分がして参りました。

今日はお盆の話になってくるわけなんですけれども、送り火をタイトルにはしてるんですけども、そもそもお盆の行事でございますのでね、お盆についての民俗学的なところからっていうか、どういふふうに住生活に結びついているのか、その辺のところからまずはお話をお願いできたらと思います。

<八木透氏>

はい、わかりました。

それじゃあ、この後はできたら、このスライドを写して、スライドに沿ってお話をさせていただこうと思いますので、今日、会場にいらっしゃってる皆さんも、できたらこの資料、紙の資料は、後から見ていただけるようにはしてますので、会場ではできれば正面のスクリーンでスライドをご覧いただきながら、お話を聞いていただけたらと思います。

それから、今日本当にたくさんの方に、オンラインでもご参加いただいているようで、オンラインの皆さんには、多分このスライドのスクリーンが写されていると思いますので、それをご覧いただきながら、お話を聞いていただけたらと思います。

今、河村先生のご説明にありました、お盆のお話から少し話を始めたいと思います。

お盆っていうのは、もうこれはもちろん、皆さんよくご存知の、もともとは旧暦の7月15日、こ

れが中元と言いますが、この中元を中心とする時期に行われる、御先祖を祭るという目的の年中行事です。ですから、現在は新暦ですので8月ですが、本来は旧暦の7月の行事で、これは昔の暦では、7月はもう秋ですので、暦の上では。だから夏の行事ではなくて、正確には秋の行事ということになります。

それで、お盆の「盆」という言葉の語源がどこにあるのかってことです。これも諸説ありますが、一番今のところ定説と言われているのは、インドのサンスクリット語が語源だと言われていて、「ウランバナ」というサンスクリット語、これに「盂蘭盆」という漢字をあてて、この「盆」という言葉が、日本で定着したのではないかというふうに言われています。

ならば、この「ウランバナ」というのはどういう意味なのか、ということなんですが、これは、日本語で言うと、「倒懸^{とうげん}」とでも言うべきか、つまり、亡くなってあの世へ行った死者は、逆さまにぶら下げられて、苦しめられてるという、古代のインドではそういうふうに考えられていたのでしょうね。つまりあの世で苦しむ死者を、仏の力に縋って、救済するという、それが本来の「ウランバナ」という、盆の起源を示す言葉だろうと言われていまして、ちょっとおどろおどろしい話ですね。

こんなイラストがあるんですが、これはNHKのテレビで、ちょうど今頃やってんのかもしれませんが、今日のニュース番組で少しお盆の話をしてるんですが、NHKの関係者が書いてくれたイラストなんですけどね。こういうふうに死者の人たちってというのはあの世で苦しめられてる、これを仏の力で救済するという、そういう元々意味だった。だから、日本では、こういう意味が忘れられて、ただ単にお盆には、ご先祖様が帰ってきて、それを懐かしいふるさとの我が家でつかの間の団らんをするという、そういう行事として定着していったんだろうと考えられています。

お盆といえば、明らかに仏教の行事だっていうふうに我々考えるんですけど、今は確かにそうなんですが、多分、元々日本には仏教が定着する前に、庶民の間に、先祖を祀る、つまり、先祖祀りの伝統があったんだと思います。そこに仏教の教えが覆いかぶさって、現在のお盆の行事が、作られていったんだろうというふうに言われています。

それと、先ほどお盆は旧暦の7月の行事だっていうふうに申し上げましたが、これは改暦で旧暦が新暦に変えられた明治6年なんですが、東日本では結構最近まで新暦でも7月にお盆をやっていたようですね。私たちが子供の頃は、東京では7月盆、だから、ちょうど7月の14日、15日って言ったら、京都では祇園祭の真っ最中なんですけど、東京ではそんな頃にお盆をやっていた。ちょっと不思議な気がしますね。月遅れっていうのが多いんですけど、今は東京や東北地方でも、大体8月にやっています。ただ一部、まだ新暦の7月で、お盆をやっているところも若干残っているようですね。

お盆の基本構造ですが、先ほども申し上げたように、ご先祖さん、京都ではお精霊^{しょうらい}さんというふうに親しみを込めて呼んでいますが、そのお精霊さんが帰ってきて、おうちでしばらく団らんをして、またあの世に戻っていかれる。だから、今の私たちの日常の言葉で言い換えますと“歓迎会”ですね。1年に1度、懐かしいご先祖様、お精霊さんが帰ってこられる、そのときの歓迎の儀礼と、またあの世に戻って行かれるときの歓送の儀礼。これが二段階のお盆の行事として、ほとんどの地域で行われている形だと思います。つまりお精霊さん迎え、それとお精霊さん送り、この送る時の歓送会の儀礼に当たるのが、送り火だということになります。ですのでやっぱりお盆はこの両方の儀礼を考えないと、半分しか語ることにならないということで、どちらも本来、火を使うんですね。迎え火送り火というふうに、昔は、私が子供の頃はほとんど街中では迎え火っていうのはもう見られなくなりま

したけど、両親や祖父母に聞くと、街中でも昔はちょっとおがらに火を焚いて玄関先でお精霊さんを迎えていたって話を聞きましたので、本来はどちらも火を焚くということで、お盆の行事が成り立っていたのだらうと思います。

ということで、どうでしょう、その歓迎会のお話に行ってもよろしいでしょうか。

<河村晴久氏>

お願いいたします。お迎えする方の行事でございますね。

<八木透氏>

最初はそしたら、いくつかの謎があるんですね、お盆に関わる行事には。その謎を少しずつ解いていくという形でお話を進めたいと思いますが、まずその一つの謎は、この歓迎会に当たる「六道参り」という行事です。

この「六道の辻」というところから、お精霊さんは返ってくるというふうに言われているんですが、「六道の辻」っていうのは一体どこを指しているのだらうかということですね。これも諸説あっていろいろなことが考えられるので、中々一言ではご説明できないんですけども、少なくとも、お精霊さん迎えをする舞台となるお寺、これは伝統的に江戸時代から、ここに挙げました二つのお寺が、その舞台とされています。

北区ではこの千本北大路から少し南へ行ったところにある「引接寺」、なかなか読めない漢字ですけどね、引接寺と読みます。ただ、多くの人たちは「千本えんま堂」というふうに呼んでおられます。閻魔大王がご本尊のお寺です。

それともう一つは東山の清水道の近くにありますが、珍皇寺というお寺です。ここは一般には六道珍皇寺というふうに呼ばれて、おそらく、京都のお精霊さん迎え、つまり「六道参り」の一番最初に行われるようになったのがこの珍皇寺ではないかと思います。

私事になりますが、私の父親の代まで、私の家は、今の祇園祭で言いますと大船鉾の町内、四条町というところにあったと聞いております。父親が、問屋をやってたが店を潰しまして、私が生まれた昭和30年には、私は北区の生まれなんですけども、大体今の祇園祭の鉾町の人たちっていうのが、この珍皇寺にお精霊さん迎えに行っておられた。鉾町というよりも、下京の方だというふうに考えていただけたらいいですね。

京都の町は中世から元々大きな賑わいを見せた2つのエリアがあって、それが四条の新町から室町界限です。それがいわゆる現在の祇園祭の鉾町がそこに広がっているんですけど。そこともう1つは、室町通りを北へ上がった、やっぱり西陣の界限なんですね。西陣からもう少し広い今の中京区から上京のエリアで、そこの人たちが、閻魔堂にお精霊さん迎えに行っておられた、というふうに言われているので、私は幼い頃から祖母に連れられて珍皇寺へ行ってきました。えらい遠いなと思って、何でわざわざこんな遠いところ行かんと、閻魔堂行ったら近いのになあと思ってたんですけど、多分私の家が元々、四条町やったので、その関係ですって珍皇寺に行っていたんやろうなと思います。今年も昨日、今日の京都新聞にはコマーシャルが載ってましたけど、「六道参り」って書いて、六道珍皇寺。これ、珍皇寺は、8月7日から10日までの4日間ですね、現在はね。閻魔堂はもっと長いことやってます。何かいつ行ってもいいような、そういう多少の違いがあるんですが。

「六道参り」の所作はこれ皆さん、お精霊さん迎えに行ったらっしゃる方が多いかもしれませんので、詳しくお話しなくてもおわかりいただけると思いますけども、まず高野槇という常緑樹の葉っぱ

が売られます。これも去年、一昨年はコロナの影響で、花屋さんが店を出さなかったんですけど、今年は3年ぶりに高野槇を売るそうです。その高野槇を買い求めて、水塔婆と呼ばれるお塔婆に、迎えるお精霊さんの戒名をお坊さんが書いてくれます。もちろん有料です。それで、有名な迎え鐘という独特の鐘を撞いて、この鐘の音を聞いて、お精霊さんが迎えに来てくれはったって気が付いて、高野槇に乗り移るんだそうです。

ちょっと写真をご覧いただいた方がいいので先に写真に行きますけどね、「六道の辻」の話は後にします。これ、珍皇寺の門前ですが、「六道の辻」ってこんな石碑が立っています。珍皇寺からもう少し、これは西へ行ったところに、これ三つ角っていかT字路なんですけど、西福寺っていうお寺があって、その角にも「六道の辻」という、石碑がありますね。これは新しいですよ。珍皇寺境内に入ると、こういうふうな風景が広がってまして、幽霊の話は後にしましょう、これが高野槇ですね。こういうふうにたくさんのお坊さんが、高野槇を売ります。これを買い求めて、ただね、高野槇ってね、河村先生も普段あんまり使われるっていうことはないですね。

<河村晴久氏>

ないですね。

<八木透氏>

京都では大体、仏さんに関する、特にお花^{しきみ}っていうのは檜ひですよ。だから、この高野槇が用いられるのは「六道参り」の時だけみたいですね。高野槇って京都近郊の山には自生してないそうです、聞いてみると。やっぱり字の通り、和歌山県の高野山周辺にはたくさんある木だそうで、何で高野槇が、「六道参り」に必要な植物になったのかっていうのは、実はよく分かっていません。誰かが持ち込んだだろうなと思いますね。

これが迎え鐘です。この鐘にはいろんな伝説があるんですが、ただ、少なくとも普通のつり鐘ではなくて、こういうお堂の中に半分地中に、埋まってるような姿で、ぶら下げられてる鐘なんです。ですから、見えないですね中はね、この綱を思い切り引っ張ると、独特の鐘の音が鳴るといって、こういう状態ですね。これを撞くのにズラッとものすごい行列ができて、長い時には1時間待ちとか、いう時もありますので、だからみんな朝早く行ったり、夜、深夜に行ったりっていうことで、昼間暑い時はあんまり、この時期ね、お参りに行かれる方は少ないですね。

これ、ここでこうして水塔婆に戒名を書いてもらいます。たくさん若いお坊さんこれみんな多分いろんな学生なんだと思いますけど、はっきり言うて字の上手な人はいませんから。とにかく他人に書いてもらうことが大事なんだというふうに言われてるので、自分で書くよりもこうして、お金を払って、若いお坊さんに戒名を書いてもらって、それをこうして、これ水回向と言うんですね。回向というのは、自分が得た功德を、他人に分け与えるという意味ですので、水の力で、子孫である我々が、亡きご先祖に、つまりこのときお盆に帰ってこられるお精霊さんに知恵を与える、或いは功德を与えることで、仏様になってくださいという、そういう願いが込められてるんだだろうなと思います。こういう所作をします。

それで、これ先言うてしまいますけど、最初の謎の「六道の辻」はどこか。これは、絶対井戸だと私は昔から言っています。

この井戸は、これも後で出てきますけど、小野篁という、平安時代の貴族が、この珍皇寺の開祖というふうによく言われてまして、小野篁というのは実在の人物です。不思議な能力がある人という

伝説があって、「六道の辻」から、夜になると閻魔庁へ行って、閻魔大王の助手をしていたと、いうふうに言われてるんですね。朝になったらまた戻ってきて、朝廷に勤めてた。公務員ですから、昔で言えば、本来であればアルバイトしてはいけないはずなんですけど、でもあの世でアルバイトをしていた公務員ということになるんでしょうか。その小野篁がどこから閻魔庁、つまり冥途へ通ったかっていうそれが、本来の「六道の辻」だろうということであれば、この井戸だというふうによく言われています。

これ冥途通いの井戸、小野篁の冥途通いの井戸というふうに名付けられているので、おそらく井戸が、元々の「六道の辻」だったんだろうなっていう気がしますね。

これが北区の閻魔堂。閻魔大王がご本尊で祀られてまして。実は閻魔堂さんはね、水回向、先ほどの珍皇寺は、お地蔵さんがたくさん祀られてる前の、棚のようなところに、水塔婆を納めて、高野槇で水をかけてましたけど、閻魔堂はこうしてプールなんですね、これ正にプールですよ。そこに水塔婆をこうして流してるんです。実はこれ、後で、一体この水回向というのは、元は何だったのか、っていうのをちょっと後でお話しようと思っていますけど、ちょっと覚えといてください。多分こういう姿が本来の水回向なんだろうと思います。プールに流す、水塔婆をね。

これが小野篁さんの像です。身長が 188 センチか、あったと言われていて、平安時代の人ですから、男性の平均身長って多分 160 センチないんですね、平安時代が 150 センチ台だって言われてるので、そこからすると異常なほどの長身で、今でも 188 センチあれば十分バレーボールの選手になれるんですけど、おそらく平安時代では、異常な、背の高さの人だったというふうに言われています。ちょっと話を戻しましょうね。

この幽霊子育て飴のお話もちょうとしましょうかね。

<河村晴久氏>

はい。

<八木透氏>

これ皆さんもご存知かもしれませんが、伝説で昔、これ珍皇寺の門前なんですね。これ昔の店舗です。今の店舗はちょっと綺麗になって、西福寺っていうお寺の向かいにあります。今でもちゃんと幽霊子育て飴って書いてますが、昔、飴屋をやっていた主人が、ある時、夕方になったら、あまり見かけぬ若い女性が飴を買いに来る。毎日 1 つずつ飴を買っていくんだそうです。それで、あのお客さんどこの人だろう、あまり見かけん人やなって言ってる日、後をつけて行ったんですね、店の主が、女性の。そうするとその女性は、後で写真をお見せしますが、鳥辺野という墓地が珍皇寺の東側には広がっています。これ平安時代の一番古くからある京都のお墓って言われていますが、その鳥辺野の墓地へ入っていきますんですね。おかしいなあ、こんなところにお家ないのになあと思っていると、墓穴があって、何とそこの墓穴から赤ちゃんが泣く声が聞こえてくるんですね。そこへその飴を買った女性が入っていく、墓穴に。赤ちゃんを抱いて、買ってきた飴をその赤ん坊に舐めさせていたというお話なんですね。これがその伝説で語られる、つまり、この女性はおそらく妊婦のときに、何らかの理由で亡くなった方なんでしょう。鳥辺野に埋葬されてから、赤ちゃんが生まれたという想定です。ですので自分はもう幽霊になって死者なんですけど、生まれた我が子を何とか育てたいという思いで、毎夜飴を買いに来て、その飴を赤ん坊に舐めさせていたという、そういう母の慈愛を語る、これ仏教説話として伝わっているんですが、だから幽霊子育て飴っていうふうに言います。このお話は京

都のみならず、地方にも似たようなお話は幾つかあります。完全に仏教の親孝行で、この赤ちゃん、飴を舐めさせて育ったという赤ちゃんは、やがて偉いお坊さんになって、生涯、母親の供養をしたというふうに言われているので、仏の徳とか、或いは親孝行を説く仏教説話として語られているんですね。

実はこの人、誰しもがご存知の、この人も実はお墓で生まれた人物なんで、人か幽霊か、私ぐらいの世代の皆さんは絶対ご存知の「ゲゲゲの鬼太郎」というタイトルの、前は「墓場の鬼太郎」と呼ばれていまして、鬼太郎は幽霊の夫婦が、幽霊の夫婦が亡くなるんです。ほんまかいな、幽霊がまた死ぬんかなと思いますが、お墓に埋められたお母さんから生まれてくるんです、鬼太郎は。だからまさに、先ほどの幽霊子育て飴の伝説そのままなんですけど、生まれてきて、鬼太郎は幽霊の子ですから、普通の人間じゃないので、生まれてすぐ歩けるんですけど、それでちょっと転んで目をガーンと墓石にぶつけて、目が1つないんですよ。そういうふうにおぼつかないので、死んだお父さんが、1人でこの世で生きていくのは難しいだろうっていうので、父親の目玉がポトッと落ちて目玉親父になったというそういう設定なんですけど、これ、作者の水木しげるさんは明らかに幽霊子育て飴のお話を知ってて、それをこの鬼太郎の誕生譚として用いたっていうふうに、ご本人もあるところで書いておられました。だから結構有名なお話になってるんですね。

<河村晴久氏>

珍皇寺さんは子供の時からお参りに行くとね、実は何か怖い感じがしたんです。

<八木透氏>

そうですね。

<河村晴久氏>

「六道巡り」の絵がありますでしょう。

<八木透氏>

はい。

<河村晴久氏>

だから結局その向こうの葬地、葬る地と引っ付いてて、そういう異次元へ通じるイメージになるところなんですね。

<八木透氏>

そうですね。やっぱり、お墓の入口にあるっていうのが、お精霊さん迎えるの舞台となった背景だと思いますし、この閻魔堂さんも実は、この辺りずっと蓮台野という広いお墓だったんですね。今でも蓮台野っていう地名は残っていますが、それは今はもうお墓がなくなってしまったので、そういうイメージがなくなりましたが、今の千本十二坊（紫野十二坊町）なんかねここずっとお寺が多いし、昔はたくさんの塔婆が立っていたというので、それが千本あったからというのが「千本通」の名前の由来だっていうのも一説には言われていますよね。

<河村晴久氏>

斎場もそうですね、東山のとこ。なくなりましたが、金閣寺の裏もやっぱりそうですね。

<八木透氏>

火葬場、二つありましたね。蓮華谷と言いまして、今でもそのあと残ってます。原谷の方へ行く途中ででしたね。

それから、これは河村先生も或いは今日いらっしゃってる皆さんも、体験された方あるかもしれませんが、私子供の頃、「六道参り」に祖母に連れて行かれて、とにかく暑い時ですから、子供って嫌ですやん、わざわざ水塔婆書いてもらって何でこんなことすんねや。暑いから帰りにね、カキ氷かアイスクリームでも食べて帰ろうって言ってねだるとね、“あかん、まっすぐ急いで帰らなあかん”って言うて、何にも買ってもらわずに、いそいそと、当時は市電に乗って、私の当時の家は今のバスターミナルのすぐ近くだったもので、市電に乗って帰ってきた。何で帰りに、アイスクリーム買ってもらえへんねやろ、と不満に思った記憶が今でもあるんですけど、後で聞くと、お精霊さんは、とにかく急いでおうちに連れて帰らないといけない。寄り道すると、道がわからなくなるんやっていう、そういうふうに昔の人は言ってて、だから「六道参り」の帰りはとにかく一目散におうちへ帰ってくるっていうね、そういう言い伝えがありましたですね。

これ、今の現在の鳥辺野です。清水さんのところからずっと東側に広がってますよね。これ大谷さんのお墓もこの一角なんですけど、夜になるとこういうお灯明が供されて、すごい幻想的な、これ私の写真じゃないですけど、プロの人が撮ってるんですが、こういう風景が広がります。だから鳥辺野は、今でも非常に広いお墓として残ってますよね。

それでもう一つだけ。これ、実は、ここにこんな石碑が立ってるんですよ、生の六道。これ実は場所はどこかと言いますと、嵯峨の清凉寺なんです、嵯峨の釈迦堂。この右側の屋根が見えてるところが本堂で、この左側に見えてるのは、末寺なんですけど、ここへ生の六道という石碑が立ってまして、これは小野篁が、この世からあの世へ閻魔庁へ行く時は、その六道さんのいわゆる珍皇寺の井戸から行った、ところが、返ってくる時、あの世からこの世へ朝になって、ここから帰ってきたっていうんですね。井戸があったそうで、昔、今はもう井戸はなくなっていますが。なんで、珍皇寺って東山の東の外れで、嵯峨の清凉寺って全く西の外れ、えらい遠いところから帰って来はるんやな。これは謎なんです、不思議な。今でも生の六道って言われてるので。江戸時代の文献にも出てくるんですね、この話が。おそらくこれはね、私の推測なんですけど、珍皇寺っていうのは、^{おたきでら}愛宕寺っていうふうに昔、別称で呼ばれてました。“^{おたき}愛宕”っていうのは、今の「^{あたご}愛宕」という漢字を書きますね。旧の群名です京都の。北から南、ずっと北側を広いエリア、^{おたき}愛宕群と、言いました。「^{あたご}愛宕」という字を書くんですね。^{おたき}愛宕寺と言ってたのが珍皇寺で、実は清凉寺は^{あたご}愛宕山のすぐ真下にあるんで、^{あたご}愛宕と非常に深い関わりのある、昔からお寺で、この^{あたご}愛宕と^{おたき}愛宕っていうのが混同した結果、この清凉寺が生の六道として、小野篁が帰ってくる場所という設定ができたんじゃないのかなと、私は思うんですが、いかがでしょうか。

<河村晴久氏>

嵯峨天皇のお墓が前になりますよね。

<八木透氏>

そうですね。

<河村晴久氏>

やっぱり嵯峨さんも関係があるんでしょうかね。

<八木透氏>

その辺が本当に、文献にもはっきり出てこないですよ。これはちょっと不思議なことです。

<河村晴久氏>

それで篁さんのお墓というのがその、堀川北大路下がったところで紫式部と並んで、不思議な方ですね。

<八木透氏>

そうですね。お墓のある場所も何でそこになったのかっていうのもよく分かってないんですよ。

<河村晴久氏>

やっぱり雲林院があったから、ということでしょうか。

<八木透氏>

なるほど、そうですね。でも、はっきり記録残ってないですね。

<河村晴久氏>

史実かどうかは分からないけれども、人々はそう思ってたということでしょうね。

<八木透氏>

そうかもしれませんね。

<河村晴久氏>

篁さんは嵯峨天皇の時代で、あの時代って源の当路がいたり、能の世界でも大変面白い時代なんですね。

<八木透氏>

多分平安時代では非常に面白い時代だった、いろんな伝説が生まれた時代だろうと思います。

<河村晴久氏>

物語の多い人ですね、篁さんは。

<八木透氏>

そうですね。

さて、もうちょっとお話を進めましょうか。「空白の3日間」というのを私が設定してるんですけど、これ何かと言いますと、先ほどから申し上げてます通り、珍皇寺の「六道参り」は、8月の7日から10日なんですね、現在。江戸時代の地史を見ますと、旧暦の7月の9日と10日の2日間だったんです。今、大勢の人が参るから4日間になったんですけど、昔は2日間だった。重要なのは、10日で「六道参り」はピタッと終わるんですね。特に珍皇寺さんは、11日に行っても誰もいません。高野槇も売ってませんし、水塔婆書いてくれるお坊さんもしません。もう10日の夜で完全に終わってしまうんですね。閻魔堂は11日でもやってるんですけどね。何で10日なんだろうかと。

もう一つ不思議なのは、私の記憶では、家でお精霊さんを、公物をお供えしてお祭りをするのが13日の夕方からなんです。多分京都の多くのご家庭はそうやないかなと思います。13日から、お参りをしてお仏壇の前に棚を作って、丁寧なお家は朝昼晩と、お精進、お味噌汁とかね、おそうめんとかを備えて、お祭りをしてました。13日、14日、15日、3日間祀って16日の送り火であの世に送る。とすると、10日に「六道参り」で迎えられたお精霊さんは、13日まで、せっかく遠来を、1年に1度しか返ってこられない、貴重なお客さんのはずなんですけど、飲まず食わずでほったらかしにされるんですね。それは私は「空白の3日間」というふうに呼ぶんですが、これ昔から私も不思議でした。なんで、それやったら13日にお迎えしたらいいじゃないか、と思うんですけど、10日なんですね、「六道参り」は。

これは色々なことが考えられるんですけど、1つは、「六道参り」は本来、お精霊さんをお迎えする

日ではなかったのではないかな。つまり、10日という日は。じゃあ何の日やったのかっていうと1つの考え方としては、これ田舎の事例から推測しますと、「盆花迎え」といって、お盆に飾るお花を田舎であれば山へ取りに行く、そういういわばお盆の準備をする日が、「六道参り」の日だったのではないかな。都会では山へ花を取りに行くってことができませんから、市場が立つんですね。市でいろんな必要なものを買って求める、「盆市」というふうに言います。その日が、元々「六道参り」の日として、その10日という日が設定されていたのではないかな。

そう考えますと、今でも五条通りに陶器市が立ちます。これは確かに10日、もうちょっと前から、大体10日、11日ぐらいまでですかね。これ陶器市ですから、お茶碗とかお皿を売るんですけど、日常使う、そんな高級なものではなくて、比較的日常生活のお茶碗とかをたくさんのお店が露店を出して売りますよね。これまさに「盆市」なんですね。京都では陶器市が盆市に当たる。これがいわば「六道参り」の日と合体したのではないかな。つまり、考えようによっては、京都の人ってすごい合理的なことを考えて、陶器市で或いはいろんなお盆の市で、物を買って帰ってきます、9日10日頃に。もう一遍また13日に、本来であればお精霊さん迎えに、行かんといかんんですけど、この暑いとき2回行くの面倒くさいでしょ、1日で終わらしてしまえ、という、そういう合理的な発想だったのではないかなというのが私の一つの推測なんです。別の人も似たようなことを言ってる人はいますが、これは陶器市の写真ですよ。今でもこうやってたくさんの露店が出ますよね。河村先生もいらしたことがありますか。

<河村晴久氏>

まさに陶器市で買い物して、お参りして帰るっていう、そのセットですね、子供の時から。

<八木透氏>

そうですね。

それともう1つは、これも可能性として、実は清水寺の「千日詣」が元々10日なんです。珍皇寺と清水寺って本当にすぐですけど、言わずと知れた清水さんのご本尊は十一面観音さんですが、観音欲日っていう日があってそれが旧暦7月10日と言われていたんですね。この日に本来、清水寺は「千日詣」の日として設定していた。今は「千日詣」もうちょっと長いですよ。お盆の時までやってますよね。大体「千日詣」ってこれ私バーゲンだっていうふうに言ってるんですけど。1日参ったら、千日ものご利益が得られるって、ものすごい大安売りでしょ。だから、私は信仰のバーゲンというふうに呼んでいるんですけども、それが1日だけならまあわからなくはないんですけど今4日くらい「千日詣」やってはるんですね。もしこれ4日間参ったら4000日もの功德が得られるのか。余りにも大安売りすぎる、と思いますが、それは冗談として、この観音欲日っていうのに、清水寺で昔何をしてたかっていうとね、この「経木流し」というのを、やっていたようです。これは私が発見したというよりも、五来重という有名な民俗学者が、かつて大谷大学にいらした、その五来重さんが書いているんですけども。「経木流し」というのは要は鴨川で、清水寺のどこかの塔頭のお坊さんが、お経を読みながら経木、お経を書いた塔婆のような木を、読経しながら鴨川に流していくんですね、死者の供養のために。今でもいろんなところで経木流しっていうのは、全国でやってらっしゃいますが、昔は鴨川にそういう経木を流してた。今もちろん川が汚れるので、こういうことはしなくなつたんですけど、それが実は先ほどの、プールに水塔婆を流す、つまり、閻魔堂さんの水回向、それに繋がっているのではないかなと思います。本来、経木流しはお坊さんがやる仏教儀礼ですけど、それ

を庶民が真似をしたというのが、いわゆる水回向なのではないかなと思います。

なので、二つ目の解釈っていうのは、「六道参り」は、清水寺の「千日詣」と合わせる形で、これも、合理的ですよ。いっぺんに「千日詣」で参って、帰りに珍皇寺さんでお精霊さん迎えて帰ってきたらいっぺんに済むという、京都の人がそういう合理的なことを考えていたのかもしれない、そんな気がします。

<河村晴久氏>

そして13日から大事にお精霊さんが家にいはるということになるんですね。

<八木透氏>

そうですね。今でも大体、多くのお家はそうじゃないかなと思いますけどね。

<河村晴久氏>

まさに今日お寺からはがきが届いて、13日に棚経をあげに行きますと、ちゃんと時間指定してくださいまして、ピッタリ13日。

<八木透氏>

お盆の棚経は大体13日、14日ぐらいですよ。河村先生のところは何宗ですか。

<河村晴久氏>

浄土宗です。

<八木透氏>

一緒ですね、私も浄土宗ですので、旦那寺が、大体浄土宗はそういう、日にちで、棚経も設定されているところ多いみたいですね。

<河村晴久氏>

天性寺さんって行って寺町三条上がった街中のお寺なんです。

<八木透氏>

そうですか。

これ「千日詣」の時のね、清水さんの内々陣なんですけどね。この「千日詣」の時だけ清水さんで普段は入れない内々陣にまで、参拝者が入れるんですね。この右側の、逗子の中に十一面観音さんが祀られてるんですね。

これ「経木流し」の1つなんです。水塔婆じゃなくてこれ「経木流し」なんです。これも「経木流し」なんです。だから、鴨川に流すっていうのが本来なんでしょうけど、これなんて完全に、先ほどのね、珍皇寺の水塔婆、水回向と同じようなことをしてますよね。でもこれはあくまで「経木流し」というふうに呼んでました。だから多分、水回向というのは、「経木流し」が元になってるんやろうなという気がしますね。

ここまでがお迎えする、歓迎会のお話ですね。

<河村晴久氏>

今度はお送りする方になってくるわけですね。

<八木透氏>

そうですね。いよいよ次が、送り火のお話になりますが、そこへ行ってよろしいでしょうか。

<河村晴久氏>

お願いいたします。

<八木透氏>

送り火も本当に文献が少なく、謎がたくさんあるんですけど、まず一つは送り火はいつ始まったのかというお話なんですね。送り火の起源を解く説は3つあります。

1つは、平安時代の9世紀に弘法大師空海が、大の文字を山に描いて、送り火が始まったと。空海が始めたという説なんですけど、これはちょっと伝説としか言いようがないと思います。なぜかというと、もし本当に平安時代に、送り火が灯っていたとすれば、必ず文献にそれが残っていてしかるべきなんですけど、全く何の文献にも、送り火の話は出てきませんので、これは伝説としか言いようがないだろうと思います。

2つ目は、室町時代15世紀の末に、室町幕府の8代将軍でありました足利義政が始めたのではないかという説です。これは私は、そうではないかと考えています。根拠がありまして、足利義政は、銀閣寺を建てたことで有名な人ですね、東山文化。実は大文字山っていうのは銀閣寺の所領です。今も半分ぐらいは銀閣寺の所領やと思います。だから、大文字の大っていうのから考えると、やっぱり銀閣寺と非常に深い関わりがある人が始めた考えるのが妥当ですし、もう一つの根拠は、足利義政の跡取りであった、9代将軍になりました足利義尚^{よしひさ}という人がいました。この義尚は24歳という若さで、亡くなるんですね。親父よりも早く死んじゃうんです。子を失った親の悲しみって言いますが、義政はこの若くして死んだ足利義尚の菩提を弔う目的で、実は相国寺のホウセンという和尚さんに頼んで、東山の如意ヶ嶽に大の文字を築かせて、そこに松明を燃やして、送り火を始めたっていう。そのことを書いた古文書が、銀閣寺に1件だけ残ってるんですね。それは偽文書だって言う人もいますが、私は信憑性はあるかなあと考えています。

もう一つ根拠がありまして、これ皆さん、今年送り火、3年ぶりにちゃんと灯るんですね、今年はね。去年までは点だけでしたので、今年ご覧になったら分かるんですけど、大文字は大体今出川通りをずっと東に突き当たった山の上に灯りましてね、ほぼ今出川通りの東の外れです、大文字山は。当時、室町時代と想定しますと、一番賑やかだったたくさんの方がいたのは、さっきも申し上げた今の四条室町、新町、あの界限です。つまり祇園祭の鉾町の辺りが一番栄えた地域です。その人のために、もし送り火が灯されていたんだとすると、もうちょっと南へ振っててもいいんですね、大の火床はね。ところが逆なんです。大の火床は真西を向いてないんです。ちょっとわずかに何度か北を向いてるんです。

ということは、大の文字はどこから一番真正面に綺麗に見えるのか。いわば大の文字から垂直に沿った地図に線を落としていくと、行き着く先は、相国寺なんですね、相国寺は今出川の北側ですからね。相国寺から真正面に見えます、確かに大は。じゃあ、相国時に何があるかっていうと、歴代の足利将軍のお墓なんです。もちろん義尚のお墓も相国寺にあります。だから、義尚に見てもらいたかったという義政の想いがあったとすれば、確かに、相国寺から一番綺麗に見えるような、場所に火床を作ったんだというふうに考えると、まあ妥当かなという気がしますね。

今、五山ですけど、北区には、船と、左大文字がありますね。大体、どの山もそうなんですけど、不特定多数の人に見せようという意図は無いようです。必ず見て欲しい人がいた、送り火は。それぞれ地域社会で、例えば西賀茂の船は確実に西賀茂の人たちのための送り火ですね。左大文字は逆にこれ、金閣寺の裏山ですから、西大路界限の人たちが一番綺麗に見えますよね。だから、大体そうなんですけど鳥居なんて明らかに京都の町向いてませんよね。京の町から見えません。あれは葛野エリア、

つまり今で言う嵐山から松尾の方を真正面に向いて灯りますので、そういうふうに見てほしい人たちがいた、そこに一番綺麗に見えるように作られたのが、送り火だと思いますが、そう考えると、義政が始めたっていうのは、信憑性あるかなと思います。ところが、さっき申し上げたように、そのことを書いた古文書が1点しか残ってない。他の資料には出てこない。それはどうしてかっていうことなんですけど、おそらく、1年しか灯らなかったんだと私は考えています。何でかという、西暦では1489年に義尚が亡くなるんです。その年に灯ってるんです。ところが、翌年の1490年に義政自体が、ご自身が亡くなるんですね。ということは義政は、大文字を灯した翌年の大文字の送り火までに亡くなっちゃうんですね。後を継承した人がいなかったのではないかと、という。特にこの当時、もう戦国期に入って室町幕府は跡取りですごいもめてますのでね、義政の意思を継いだ人がいなかったから、結局1年ぽっきりで送り火はもう灯らなくなったのではないかと、いうふうに私は考えております。

その次に記録にはっきり出てくるのが慶長8年、江戸の初期ですね、1603年の『慶長日件録』という、船橋という貴族の日記に明らかに出てきます、これは旧暦7月の16日、鴨の河原から送り火を見たというような記載がありますので、これは間違いなく大を指してるんだらうと思います。こっからは毎年灯ってるんですね。なので、少なくとも慶長8年と考えると、それでも今から400年以上前から、もう年中行事として灯されていたということなので、そういう意味ではすごい歴史がありますし、他の4山ですね、妙法も、もちろん船形・左大文字・鳥居、左大文字だけがちょっと遅いようです、始まったのが、50〜60年ほど大よりも遅いそうなんですけど、大体17世紀の前半に作られてます。ほぼ、17世紀中にすべて今の五山は揃ってるんですね。

これもね、河村先生もよくご存知やと思いますけど、この慶長8年から毎年灯ってるっていうのはまず間違いはないんですが、『慶長日件録』ってすごいマイナーな史資料なんですよ。歴史資料としますと、貴族の日記ですから。もうちょっと正史と呼ばれるような、正式な文献に載っててもおかしくない行事だと思うんですけど、載ってないですね。それは何でだろうか。どうしてかと思われませんか。

<河村晴久氏>

つまり、国とか公が関わっていないというところでしょうかね。

<八木透氏>

おそらくね。私もそう思いますね。江戸幕府とか或いは朝廷とかが、主導して始めたのであればもっと正規の記録に残るはずなんですけど、そうではない人が、始めたんだらう。なので、おそらく私は、銀閣寺の関係してたお坊さんたちだったのかなというね。それは多分、義政の意思というのはどこかで受け継がれていたんだらうと思いますから、そういう僧侶が始めた行事なのではないかなというそんな感じがしますね。でもそれはもう全く分かりません。

それで、その送り火のルーツ、つまり五山の送り火の元にあったものは何だったのかっていうことなんですけど、それは多分ここに挙げました「万灯籠」という、松明行事だらうと、思いますし、これはほかのいろんな人もそのように言っています。「万灯籠」って何かっていうと、たくさんの火をたくのが「万灯籠」、現在では、万灯会っていう行事がありますよね。有名などこでは、化野念仏時の、あれは万灯会で、千灯とか万灯とかっていうのはたくさんの炎を灯すということなんですけど、「万灯籠」っていうのは室町時代の応仁の乱の直後あたりに、京都の北部の、どっちかというところいうたくさんの火をたくのは街中では危険なので、山間部が多いんですが、たくさん記録が出てくるんで、

やっぱり死者供養なんですね。死者供養とともに、村内安全、悪いものを払うという火の力に頼った、そういう行事だろうと思うんですが、十二灯型万灯籠っていう文献に出てきます。つまり、12の炎を灯した。

これがそうなんですね、この写真がね。実はどこかと言いますと、遠く丹後半島、旧久美浜町河梨^{こうなし}という村で、今も行われています。これ、小さな山の上でこういう送り火とは大分形が違いますね。カセを、横木をカセっていうんですけど、横木を組んで、左右に6本ずつの松明を燃やしてます。今一番先端には、もう1つあるから13あるんですけど、これ十二灯というふうに、この行事は呼ばれています。こういう行事が実は京都の北部にたくさん分布しています。これが多分送り火のルーツではなかろうか。それでこれ、人力で立てるんですね、昔はもちろん。これ大体ね、もう一つ写真あったかな。この写真ご覧いただいたら、人の背丈から比べると、10メートルないかぐらいなんですけどね。このぐらいの大きさが限界ですよ、寝かしてある状態から綱を引っ張って垂直に立てるためには。これ以上大きくなったらおそらく、人の力だけでは、引っ張っても、垂直に立てられないでしょう。このぐらいの大きさの炎だったら、見える範囲が限られてますよね。でも、送り火はもっと遠くの人にも見せたいという、特に大文字山から相国寺まで見えないといけないということになると、このぐらいの大きさでは、不可能です。いかに大きな炎を灯すかっていうので考えたのが、山の斜面に火床のようなものを決めて、そこで大量の松明を燃やして、文字とか形を写すっていう。だから、この万灯籠より発展して、火の「風流」^{ふうりゅう}化した火っていうふうに、呼んでいますが、それが送り火になったのではないかなというふうに思います。

これは現在の五山ですね。昔はもっとあったんですよ、幻の送り火でね。今でも確実にあったと言われているのは市原という鞍馬街道の途中の村に「い」、ひらがなの「い」の字が灯った。鳴滝の方に横一本の「一」っていうのがあったと言うんですけど、いつ無くなったか本当によく分からないですね。ちょっとマニアックなことをもう一つだけ申し上げますとね、私、鳥居の送り火のお手伝いをしたことがあって点火も2回ほど昔やったことあるんですけど、それでよくわかりました。左大文字も船もちろんそうです。大だけは見えます。これ4山から大だけは見えるんです。でも他の山は見えません。例えば鳥居から左大文字見えません。左大文字から船見えません。だから大だけが見えるんです。大からは4つ全部見えるんです。ということはやっぱり大がもともと基準になってたんだらうと思いますね。今は整然と8時から5分刻みで西へ向かって点火されていきますけど、昔は適当に点けてたそうですね、連合会がなかった時代、ただ大が灯ったらもうええやろ、点けようっていう、見えますから、というふうに長老の方が仰ってました。やっぱり大が基本であったっていうのは確かでしょうね。

ここでちょっと写真。これね、出町柳から見た写真なんですけど、ちょっと北へ振ってるっていうのがこの写真でもわかりますよね。

松ヶ崎の妙法も、これ2つで1つと数えてますね。「法」が大分後からできてるんですね。

船形、これはもうほんとに、西賀茂の人たちのお精霊船だっていうふうに言いますね。この船にお精霊さんが乗って、西方浄土へ帰っていかれるんやっていうふうにな。

左大文字は、さっきも申し上げた、ちょっと遅れて始まったんですけど、大きな特徴は、如意ヶ嶽の銀閣寺の裏山の大が、池に、朝廷の池に映って左へ跳ねたっていう。だから対称形だっていうふうに言われています。でもこれ対称形とあまり思えないんですけどね。普通に、大の字書いたらこんな

ふうになりますけどね。それと、左大文字は、点火の様子をご覧になってたら、筆順で点火してるっていうふうに言いますね。点々〃とね。

最後の鳥居は大きな特徴があって、走る送り火っていうふうに言われて、これはもともと他の4山は火床に初めから松明を設えといて、一斉に火を点けるんですけど、担当の者が。鳥居だけは、種火のところで、松明を持ってる人が火を点けて、これ108つあるんですけど、火床がね、それぞれに走って行って、鉄のお皿のようなところにグサッと突き挿していくんですね。

これ実は鳥居の種火なんです。ちょうど真正面、葛野群なんですね、もういわゆる松尾の方を向いてるっていうのはこの写真でもわかりますよね。だから鳥居だけがその点火の方法がちょっと違う。面白い点火の仕方をしています。

ということなのですが、最後もう一つ、大が二つありますよね、送り火にね、左と右と。なぜ大なのかっていうのは、よく昔から聞かれたお話なんですけどこれ、河村先生ご存知ですか。

<河村晴久氏>

いいえ。

<八木透氏>

大という文字の起源と言いますか、どうしてそのご先祖を送る文字が大だったんだろうか。これもなかなか、はっきり分らないですよ。やっぱり諸説ありますねいろいろ。人の形を表してるとか、言う人もいらっしゃいます。ただ、私は、多分こうではないかっていうのは、中国の非常に重要な、特に仏教にも取り入れられた古代思想に「五大」っていう考え方があります。「五大」っていうのは、人間が生きていくために、生物が生きていくために必要な五つの要素を指しているんですけど、ここに挙げました地、水、火、風それから空、風ってのは空気なのかもしれませんね。この五つがないと確かに生き物は生きていくことができないというふうに言われて、それが仏教の思想にも取り入れられている。

実はこの写真は、六波羅蜜寺に、万燈会というのが、8月の14日、15日に行われています、今も。六波羅蜜寺は空也上人が平安時代に建てたお寺と言われている、西国札所の一つですが、ここも観音霊場ですね。空也上人が始めたっていうのがね、実は大のお灯明なんです。本堂にこういうお灯明がロウソクで灯されるんですね。今でも、六波羅蜜寺にいらっしゃったら、見られます。こんなふうにいっぱい大が灯るんです。これもというか、逆に大文字は、足利義政がこの六波羅蜜寺のお灯明の大を山に移したんじゃないか、こっちは平安時代からあると言われてますから、もう明らかに古いので、千年以上続いているというふうに言われています。もしかするとそうかもしれないという気がします。最近ではLEDで大が灯るんですけど、六波羅蜜寺ではね。至るところが大が灯っている。

これもやっぱり「五大」という考え方から来てるのかなと私は思うんですが、仏様でも一番、特に密教で一番中心となる、仏っていうのは大日如来って言いますよね。あの大日如来の大もおそらく「五大」から来てるんだろうと思いますから、大文字の大も、「五大」が起源かなあと 생각합니다。

最後になるんですけど、先ほど言いました幻の送り火、「竿に鈴」っていうのがあったらしいですね。どこかわからない。本当にね、どこか分かってないんです。明治、大正はないな、明治の新聞には載ってるんです。でもそれどこかってまともに書いてないんですね。

「蛇」っていうのもあった。これは早くに失われた、多分、ある人の記憶ではね、昭和の初期もあったっていうんですね、「竿に鈴」っていうのはね。見たという方がいらっしゃるんですけど、それも

どこかわからないです。おそらく今の嵐山の西側だと言われてるんですが、山を上がってみても火床確認できないんですね。これ、まずそもそもなんで、はっきりした場所が特定できないのかということですけど、多分それは、私の説は間違っていないのではないかなと思うのは、毎年灯されてないんですよ。市原の「い」もね、その1年間の間に、死者が出た、亡くなった人が出た年に灯るっていうふうに言っていましたので。だから、もし10年間、その村で、誰も亡くなった人がいなければ10年間灯らないです。そうすると、10年も灯らなかつたらもともとどこに火床があったかって分からなくなりますよね。ひょっとしたら場所を転々と移動したのかもしれない。そうすると場所の特定ができない。多分そういうふうにして、無くなっていった、もう維持ができなくなっていったやろうなあとと思いますし、もう1つは廃仏毀釈。明治の廃仏毀釈の影響で、京都府が布令という、今でいう条例のようなものを出してて、もう、送り火とか六斎念仏とかそういう無意味なことはやるなって言うんですね、京都府が。それすぐ撤回するんですけど、そういう影響で、送り火をやってた、細々とやってた村なんかはもう止めてしまった、明治の比較的早い時期に無くなったということも、考えられますが、本当にこれは謎です。幻の送り火です。

<河村晴久氏>

そして送られた先はどこへお帰りになるかということですね。

<八木透氏>

そうなんですね。これが最後の、今日お話をしようと思っていた最後の謎なんですね。

よく送り火が灯るので、お精霊さんは天上に、火の勢いとともに、天へ帰っていかれるというふう
に仰る方がありますが、私は京都で生まれ育って、京都のことをよく知ってた祖母なんかの話を幼い
頃から聞いてますと、お精霊さんは天に帰るっていう話は聞いたことないですね、私は。これは今日、
お話を聞いていただいている皆さんもご経験がある方いらっしゃるのではないかと思います、私が幼
い頃は、お盆の送り火の日、夕方からこれまた浄土宗の習慣ですよ、送り団子っていう団子を作って、
いろんなお供物と一緒にこのぐらいのこもとした、高野槇もそこ入れてましたかね、半紙で包みま
して、紐でぐるぐるっと巻いて、鴨川の堤防へ行ってね、川へポイっとしてました。そんな経験あり
ませんか。

<河村晴久氏>

いや、それは私は知りません。

<八木透氏>

そうですか。

<河村晴久氏>

はい。

<八木透氏>

毎年ね、午後7時ぐらいです。それで、もうちょっとしたら送り火が灯るというて、近所の家もみ
んなそれをやってるんですね。だから鴨川が、翌朝ものすごい汚れて、えげつない状態になってたな
という記憶がありまして、それはやっぱり川の汚染に繋がるっていうので、いつ頃やったか、東京オ
リンピックの頃だったと思うんですけど、条例で、供物を川に捨てないでくださいっていうね、そう
いうお触れが出たのではないかという記憶をしています。それから、川へ捨てなくなりました。代わ
りに、今でもあるんでしょうか、鴨川のね、河川敷に京都市が回収するかごが置かれて、御先祖の供

物をここへ入れてください。今はそれもさすがに京都市はやってられないですかね。昔それを覚えてます。川の流れの横というよりももう本当にあの堤防のすぐ下。散歩を皆さんされているところにかごが置かれて、そこに、お盆の供物を収めるっていう。それで次の日、回収していただいていたのかな。だから、とにかく川へ流してたんですね。おそらくそれは、川下の彼方へお精霊さんは帰って行かれると私は思います。

京都の人にとって鴨川っていろんなものを流していた。今でも、夏越の祓のときの人形なんかね、上賀茂神社で川へ流してますけど。お盆の供物もそうでしたし、私の記憶では、節分のときに、年の数の1つだけ多くの豆を食べるし、それを集めてきて家族みんなの、数を足した豆の数を集めて、それを半紙で包んで、体の悪いところを撫でてた記憶がありますね。頭が良くなりますようにとか、それを最後どうしたかというたら、鴨川に、それも捨ててました。祖母が元気だった頃はそうしてた記憶があります。だから、それは多分、祓いですよね。要するに、豆に我々家族の悪いものを全部託して祓うという。だからそういうものも全部川へ流すっていうことは、おそらく、川下の彼方へ送ったのではないか。だからご先祖様が、川下の彼方へ帰っていくとなると、これやっぱり私は特殊なことを考えているとはよく言われるんですけど「水中他界」っていうね、言葉が使えるのかな。

どうして、六道の辻が井戸だったのか。やっぱり井戸からひょっとしたら、ご先祖さんお精霊さんは帰ってこられたのかもしれませんがね。小野篁があゝの世へ通った井戸、でもそこは、この世とあの世をつなぐ通路だったとすれば、そこからお精霊さんが帰ってこられたという考え方があったのかもしれませんがね。そうすると、水の世界からお精霊さんは帰ってくる、それでまた水の世界へ送るということは確かに矛盾しない、とも思いますが、ただ、川下の彼方、鴨川の川下の彼方ってどこやっていうと、難波の海なんですよ。大阪湾なんですよ、行き着く先は。これは祇園祭の時にも、平安時代の記録に、疫病が大量に発生してたくさんの死者が出た年は、小さな神輿を作って、船岡とか出雲路とかで、御霊会をやった。それ全部川へ流してるんで、だからもともと祇園祭の疫神も、鴨川へ流されていた。だからそれは行き着く先は難波の海って書いてあるんですけど、海は無限の世界だからあそこへ疫神は流れ着くと、もう無の状態になるというふうに考えられていたんですよ。ということは川下の彼方は海なので、海へ帰っていく御先祖様が、翌年珍皇寺の井戸からまた戻ってくる。ちょっと違うやんという気もしますが、ただ、水の世界っていうことで考えると、まあさして矛盾してないのかなという気もします。

<河村晴久氏>

三途の川を渡ったり、大乘仏教でも船に乗って、彼の岸へ至るっていうと、何かその水の世界っていうのが、全部境界に、境目は水、というところへ繋がるのでしょうか。

<八木透氏>

そうですね。やっぱり、三途の川という言葉もありますように、この世とあの世の境界っていうのは水が常に出てきますよね。だから水回向とかっていうのもきっとそういう、六道参りには水の登場する儀礼が非常に多いですよ。それも何かお盆の慣習と繋がってるのかもしれませんが。

これは皆さんどう思われるかですけど、私は少なくとも、京都の人にとってお精霊さんは天に帰るっていうのはちょっと考えられないんですね。そう仰る方いますけど、送り火は炎が燃えるので、煙がたなびきますから、その連想で天上他界っていうのを、想定されたのかもしれませんが、京都の伝承で、お精霊さんが天に帰るっていうのはちょっと聞いたことがありませんし、何で鴨川にその供

物を流してたのかっていうことを考えても、やっぱり私は、川下の彼方へ帰っていった。京都の流れは地下水も地上の川もすべて、最後は淀川を経て、大阪湾に注ぎますので、京都の人たちは、特に鴨川っていうのは、神霊の通路というふうに思っていたんでしょうね。神も仏も川を通して、また神の世界、仏の世界へ帰っていくというふうに、考えていたのではないのでしょうか。

最後にお見せするこれは洪水になりそうな淀川ですけど。こんなときもありましたね。これが大阪湾のちょうど河口付近からの空中写真ですね。淀川がいかに蛇行して流れてるかっていうのが、よく分かりますよね。昔の御先祖は、ここへ帰っていったと考えるとなかなか、広大な夢が見れそうな、そういう世界感が広がっているのかなっていうそんな気もいたします。

今日私が準備したのは大体この程度のお話なんですが、いかがでしたでしょうか。

<河村晴久氏>

本当に面白いお話で、難波の寺、四天王寺さんになると今度は極楽の西門にまっすぐやって「日想じっそう観かん」に繋がって参りますね。

<八木透氏>

そうですね。

<河村晴久氏>

なんというのか京都に住んでいて、私、先生より1つ若いんですけどやっぱり私が知らない習慣がたくさんあったんやなあってことをつくづく思わせていただきました。そしてその記録に残ってないってやっぱり公じゃなく地元でなさってたという、民間でやってたというところで大きな特色があるっていうのは、これは興味深いお話でございましたですね。私もね相国寺の鐘撞き堂から拝ましていただいたことがあります。大文字が真っ正面、最高でした。

<八木透氏>

やっぱりそうですか。相国寺からは綺麗に見えるやろうなと思います、私見たことないですけど。

<河村晴久氏>

身内にこう亡くなった方があると、本当にそれまでとは違う印象でね、送り火送らせていただくことになりましたね。しかし今日は本当に興味深いお話いろいろありがとうございました。

<八木透氏>

とんでもないです、こちらこそ。

<河村晴久氏>

まだまだ聞きたいんですが、時間がいっぱいになりましたので、これで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

<八木透氏>

こちらこそ、ありがとうございました。